静岡県立大学附属図書館

シリーズ　私の一冊の本

看護学部　　長澤　利枝 先生

澤村　修治　著

『 日本のナイチンゲール～従軍看護婦の近代史』

小鹿閲覧室　369.15//Sa95　図書新聞

第二次世界大戦後約 70 年以上の年月が経過した現在、戦争体験者の高齢化から直接体験談を伺う機会が年々困難になってきています…そのため、直接お話を伺うことができなくても、せめて体験者の方々がどのような体験をされたのかを、記録に残し後世に伝えていくことの重要性がさかんに言われるようになってきました。

私は、ここ数年間授業で看護師のストレスについて講義をしてきましたが、「看護師にとって最も大きなストレスを受ける状況とは何か？」を考えていくと、戦争という極限の状況下で看護活動を行うことではないのか…ということに思い当たりました。歴史を振り返る中で、第二次世界大戦時、日本においても日本赤十字社の看護婦達が、従軍看護婦として中国や東南アジアの各国へ派遣され、想像を絶する過酷な状況下で精一杯の最善を尽くし、看護活動をしていたことが改めてわかりました。

この本では、日清戦争から太平洋戦争までの各戦争期における、日本赤十字社の従軍看護婦たちの状況が、時代背景と共に年代順に述べられていきます。

彼女たちは、「軍に従って行動し、内地の予備病院だけでなく外地の病院船や兵站病院、ときには第一線の野戦病院でも働く存在だった。＜中略＞近代日本において看護婦は、戦争に参加した最大の女性集団である。」と述べられていました。

そして、太平洋戦争末期には、「看護婦たちは厳寒の地では凍傷に悩まされ、南方では風土病にやられた。戦闘地域では空襲を受け、機銃照射にも見舞われた。病院船では機雷攻撃を受ける。ジャングルをさまよって倒れる者、力尽きて動けなくなる者、戦局悪化ののちは、悲惨な最期を迎えた看護婦は少なくなかった。」と述べられていました。ちなみに別資料では、戦時下の厳しい経験がトラウマとなって、精神疾患を発症したり、自殺に至った看護婦がいたということも記載されています。（「戦争と看護婦」川嶋みどり他, 2016.）

かつて日本の看護婦達が、戦争という極限下で耐えうる限界に近いストレスを抱えながら、看護活動を行っていた事実があったことを知ることで、看護とは何か、平和とは何かについて、改めて考える契機としていただけるとうれしく思います。

戦時下の看護婦についての授業を受けての感想に、次のようなことを書いた学生がいました。「平和な時代に生まれて、看護ができる幸せを感じました…。」戦時下の看護婦たちが願ったであろう平和への想いが引き継がれていく…そんな実感から、ふと胸が熱くなりました。